

今回は、建築にまつわる儀式の中でもまず最初に執り行われる地鎮祭のお話をしたいと思います。これは建物を建てる前に、土地をお守りいただいている神さまにご挨拶をし、工事の無事と守護を祈願する儀式です。

まず敷地いみだけの中ほどに斎竹しめなわを四方に立て、それらを繋ぐ注連縄を張り、その中に南を向いて祭壇を設けます。斎竹には葉付の青竹が使われますが、竹は神と並んで清浄な植物のひとつとされ、また「斎」という字には浄める意があります。そして注連縄が神聖な場所を示すことから、この斎竹と注連縄で囲まれた場所は、俗世と結界した清浄で神聖な場所であり、神さまに降臨していただくための聖域となります。

式は参列者を祓い清める「修祓しゅぱつ」に始まり、「降神こうしん」で神さまをお招きし、「献饌けんせん」で神饌しんせんをお供えます。そして、神職による「祝詞奏上のりとそうじょう」で神さまにお祭りの趣意とお祈りの言葉を申し上げた後「清祓きよはらい」で、四方のお祓いをします。

次が「地鎮の儀かりぞめ」で、まず初めに設計者が鎌で草を刈り、穿初で建主が鍬で土を掘り、神職による鎮物埋納の後、施工者が鋤にて土をかぶせます。それぞれの動作は三回で行いますが、私はいつも「エイッ」「エイッ」「エイッ」と声に出し、気持ちを込めて、鎌を入れていきます。また、この時使用される道具は、それぞれ斎鎌、斎鍬、斎鋤といわれ、やはり浄められたものとされています。それから玉串奉奠で、神職および参列者一同が玉串をお供えして二拝二拍手一拝の拝礼をします。玉串は、神の枝に四手を結んだもので、神さまの御霊と参拝者の魂を結ぶものとされています。その後「撤饌てっせん」で神饌をおさげし、「昇神しょうしん」でお招きした神さまたちをお送りして地鎮祭は終了とな

ります。このように、地鎮祭は主に神道に則って行われますが、仏教やキリスト教での地鎮祭もあります。キリスト教の場合は神父様(牧師様)の主導により、聖歌を歌い、聖書を鎮め物としたこともあります。

地鎮祭は吉日の午前中に執り行われます。吉日といえば大安、友引といった六輝が一般的ですが、これは戦後になって人気急上昇したらしく、江戸から戦前までは、どうやら十二直(中段)の方が日常生活に深くかわり、重要視されていたようです。十二直で地鎮祭の吉日といえば「ひらく(開)」「なる(成)」「さだん(定)」「のぞく(除)」というところです。また、六十干支では、甲子、甲寅、甲辰、乙酉、戊申、庚子、庚戌、壬子、壬寅(三隣亡、土用はのぞく)が、地鎮祭の吉日といわれています。すべてが満足する吉日は難しいので、工程や参列者の都合とも折り合いをつけながら決めることとなりますが、いずれにしても、この日を迎える朝はいつも、気持ちも新たに引き締まる思いがします。



初めの儀

十二直じゅうにちよく：曆注の一つで、建・除・満・平・定・執・破・危・成・納・開・閉のことである。「中段」「中段十二直」とも呼ばれる。
干支えと、かんじ：十干と十二支を組み合わせたもので、この二つを組み合わせて作られる歴法である。十干十二支じゅうかんじゅうにし、六十干支むそくじゅうかんじ、天干地支てんかんちともいう。